

人をたすけることが ようぼくの喜び



真 朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

互い扶け合いというは、これは論す理。
人を救ける心は真の誠一つの理で、救
ける理が救かるという。 おかきさげ

この道は、自分の心のほこりを払い、心を澄み切らせることが大切ですが、真に心を澄み切らせるには、教祖のひながたを見つめ、「人をたすける心」になり、自ら教えを实践することが必要です。内に向けては胸の掃除に励み、外に向けては人だすけを实践して、相手と共に陽気ぐらしの喜びを分かち合う。一人でも多くの人に、一日も早く、親神様の思召を知ってもらい、親神様の御守護のありがたさを味わってもらいたい。ひたすらその心で周囲に声を掛け、お話を取り次がせていただく。

にをいがけ、おたすけは、人をたすけるだけでなく、自らをたすけていただく道でもあります。人をたすけることで自らのいんねんを切っていただき、真にたすかる道を歩むことができます。

自らが心を治めて通るだけでなく、周囲と手を携えたすけ合いながら、一手一つに陽気ぐらしを体感する。この歩みこそが「たすけ一条の喜び」の姿。心を澄まし、我が身を忘れて人だすけに懸命に励む中で、親神様に守られ、自らも成人させていただくことが、ようぼくの喜びなのです。

正面方加

9月は「にをいがけ強調の月」として各教会を拠点に、またそれぞれの地域において布教活動が勇んで行われた。

あるようぼくは、声を掛けられ、はじめは乗り気ではなかったものの、参加してみると不思議な御守護を見せていただき、その後も笑顔で活動に参加していた。動くことによつて勇み心も出てくるのだと思う。こうした動きをこの期間だけでなく、これからの普段にも生かしていくことが大切である。

真柱様は、「今年は年祭活動の結果が表れる年」と仰せくだされた。ただ待っているだけでなく、たすけ一条に動くからこそ、その喜びもお見せいただくことができるのである。各教会の心定め完遂に向けて、おたすけと丹精に精いっぱい動かさせていただくみである。

《9月月次祭 挨拶》

道を担う世代の育成に しっかりと努めさせていただこう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃からたすけ一条の道の上に真心を込めてご丹精くださいます、誠にご苦勞様です。只今、大教会9月の月次祭を共々に勇んで勤めさせていただきましたことは、大変嬉しくありがたい次第です。

先ほど、本部学生担当委員会・中山祥吉委員長から、若い世代の育成についてのお話を聞かせていただきました。ご自身の経験を通して大変分かりやすいお話だったと思います。若い世代の育成についてのポイントを2つ挙げられましたが、一つは、若い人たちに歩み寄って、相手のことを理解すること。もう一つが、そうした世代をおたすけにしっかりと巻き込んでいくこと。この中で共通して出てくるのが「声を掛ける」ことです。

しかも「第三者として声を掛ける」という話を聞いたときに、私もいろいろと思い浮かべて、「あの子にもこの子にも声を掛けてやったらよかったかな」と思う顔がいくつか浮かんできました。もちろん、親が子供に「何とか育ててもらおう、信仰についてもらおう」と声を掛けるわけですが、それを補うのが第三者の声である。なるほどなと思いました。しかも「善意の第三者」の声というのは非常に大切だと、改めて感じました。

また、「丹精とは共に歩むことである」と、三代真柱様のお言葉を引用したお話もありましたが、ここに出てきたのも、まず声を掛ける、ここから始まるということです。ですから声を掛けることは本当に大切です。また、学生会のさまざまな活動へ参加を促してほしいとも仰っておられました。参加を促すためにはどうするのか。これも声を掛けることです。

こうした若い世代の育成の一番の肝は、声を掛けることだと思います。いくら素晴らしい活動であったとしても、当人に声を掛けなければ、行くか行かないかは本人が決めることかもしれない。それが、その選択肢すら与えることができない、ということです。もっと言えば、その活動や動きの存在すら知らせないということにもなります。

ですから、若い世代の育成のスタートが声を掛けることであると、考えていいと思います。声を掛けなければ、また声を聞かなければ、何も始まりませんし、何も動きません。声を掛けるということは、心を掛けるということです。そうした若い世代に心を掛け、それを言葉として声に出して、そうした世代の育成に共にしっかりとつとめさせていただきたいと思っています。

この道は末代の道です。末代かけて陽気ぐらし世界の実現へと進んでいく教えです。今を歩む私たちお互いがやるべきことの、大切な一つが次の世代に信仰を確かに繋いでいくことです。どうか今日の講話を参考の一つとして、次代の道を担う世代の育成に、しっかりと努めさせていただきたいと思っています。

さて、今月は「にをいがけ強調の月」です。大教会では連日神名流しを実施しておりますし、大教会の公式インスタグラムで各

教会の勇んだ布教実働の姿を拝見しています。皆様方においても、声を掛けること、また教えを語り伝えること、おさづけを取り次ぐことを意識して、教会や個人で動いてくださっていることとあります。私自身も、今月は本当に教祖の不思議なお手引きを見せていただきました。これについては、またの機会に改めてお伝えできればと思います。

また、この月末 3 日間の「全教一斉にをいがけデー」は、日常のをいがけに繋げるための励みとして、また種蒔きとして実施されます。私たちは、お互いに教祖の道具衆として、

この人になをいを掛けんならんと思えば、道の辻で会うても掛けてくれ。これからこれが仕事や。

明治 40 年 4 月 7 日

このお言葉を常日頃から心において、にをいがけに、おたすけにと勇ませていただきたいと思ひます。

来月は 大祭月 になります。

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

『稿本天理教教祖伝』1 頁

との世界たすけの宣言をもつて始まった、立教の月です。この親神様の世界たすけの思召に、各々が精いっぱいお応えさせていただきたいとの思いをもつて、仕切っておたすけと丹精に力いっぱい励ませていただきたいと思ひます。そして、秋季大祭には私どもの精いっぱい御恩報じの真実を、おちばに尽くし運ばせていただきたいと存じます。どうか皆様方の、誠真実のご丹精をお願いいたします。今月の挨拶とさせていただきます。

(要約)

立教百八十九年 九月 月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には果てしなき親心のまに／＼、一れつ人間をお育て下され、不思議自由自在の理を以て、身上に悩み事情に苦しむ人々をおたすけ下さいまして、陽気ぐらしへと導き下さいます御守護の程は、誠に有り難く勿体無い極みでございます。

私共は日々感謝の心で御恩報じに励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりこれの教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、九月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を楽しみに参らせて頂きました芦津の道の子供達が、日頃賜る御守護に御礼申し上げ、共におたすけの心でつとめに勇む状をもご照覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、たすけ一条の道の一層の進展を御守護下さいますようお願い申し上げます。

尚、今月の神殿講話は、本部学生担当委員会・中山祥吉委員長に來会を頂いて、学生層育成者講習会としてお務め頂きますが、学生層という大切に難しい世代に確かな道を伝えていけるよう、真心を込めて育成に当たらせて頂きたいと存じます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、身の内をはじめ家族や周囲の人々の上に、更には広く世界の上に絶え間なく賜る御守護をゆめ忘れることなく、御恩報じ一筋に歩ませて頂き、殊に秋の大祭を仕切つて、精一杯の真実をおちばへつくし運ばせて頂けるよう、おたすけと丹精に心勇んで務めさせて頂く所存でございます。又、月末の全教一斉にをいがけデーを布教の励みに、常日頃から、にをいがけ、おたすけを心掛けて、未だ教えを知らぬ人々に教祖の教えの素晴らしさと信仰の喜びを伝え広めさせて頂きたく存じます。

何卒、親神様には、旬の御用に勇む教会長、ようぼくの真実をお受け取り下さり、よろづたすけの理を一同に遍くお垂れ下さいまして、一手一つに成人の実を挙げる事ができますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《9月月次祭神殿講話 学生層育成者講習会》

若い世代に声を掛けて 手を差し伸べよう

本部学生担当委員会委員長 中山祥吉先生

一歩近づく努力を

教祖百四十年祭を勤め終えて早9カ月となります。次の塚へ向かって新たに歩み出していたでいることと思いますが、その中で、それでは若い人たちに何ができるのか、何を伝える時なのかということにつきまして、今日は一緒に考えたいと思います。

学生さんの話はもちろんですが、20代後半ぐらい、できれば30代ぐらいまでの、皆様の身の周りにいる若い人、特に最近声を掛けてもなかなか忙しくてこちらを向いてくれないような人を、頭に思い浮かべていただきたいのです。

私の父は81歳ですが、一緒にご飯を食べているときに、大学生の娘を見て「いい色になったね」と

言うのです。付け爪の色が変わっていました。私は一切気付きませんでした。父は気付くのです。

またあるときは、父が娘に「今度、めめが主役らしいな」と言うのです。俳優の目黒蓮さんのことを「めめ」というのですね。私は知りませんでした。父はそれを知っていて、父とうちの娘がドラマの話で盛り上がるのです。「あのドラマはいいドラマやな。おたすけしとるな」と言うのです。

今日お伝えしたい1つ目のポイントは「相手のことを知ろうとする努力」です。今の若い子がどんな思いで、何に興味を持って、どんな心で毎日を歩んでいるのかというのを、こちらが少し歩み寄って知ろうとすることがとても大事だと思うのです。

私は父のようにはなかなかないと思うのですが、では教祖はどうされていたのでしょうか。

『逸話篇』を紐解きますと、若い人の話がいくつか出てまいりまして、教祖も若い人に対して声を掛けておられます。

例えば「女房の口一つ」という逸話は「女房の口一つで旦那さんが変わるんだよ」という話ですが、その前半部分に出てくるのです。松田利平の娘・やすさんが、十代の頃から数年間、教祖の炊事のお手伝いをしていたのですが、

「おまえの炊いたものを、持ってきてくれると、胸が開くような気がする。」

『逸話篇』32「女房の口一つ」と教祖はおっしゃっている。「胸が開く」とはどういう意味か調べますと、昔の扉はつかい棒をして開かなくするわけですが、「開く」つかいが下りる」というのは、「心配事が一つなくなる」という意味だそうです。

「教祖の心配事が一つなくなる味」とはどんな味でしょうか。普通で

あれば「美味しかったよ」というところを、教祖はわざわざ「胸が開く気がする」とおっしゃっている。これはきつと相手の立場に立つて、ご飯を作ってくれたやすさんの気持ちを汲んで、この一言を出されたのだらうと思うのです。

もう一つ「逸話篇」に「神妙に働いて下されますなあ」という話があります。教祖は、当時18歳の西尾ナラギクさんに、

「こんな時分には物のほしがる最中であるのに、あんたはまあ若いのに、神妙に働いて下されますなあ。」

37「神妙に働いて下されますなあ」とおっしゃった。18歳ですから、今で言うと高校生です。相手の立場に立つて、「こんな時分には物の欲しがる時なのね」とおっしゃっています。

そして私が注目したのは、糸紡ぎの御用をしていて、ナラギクさんのところで1つ分出来上がると、教祖がお越しになって、その出来上がった物を3度お頂きになって、このお言葉を下さったのです。



これは「おぢばへ帰ってきて、教祖の近くで御用を務めた。よう頑張ったなあ」ということではないでしょうか。そしてこの逸話が残っているのは、教祖が若い人に一歩近づいて、「よく頑張ったなあ」と言ってくださった印象が、ナラギクさんに残ったからだと思うのです。

では、私たちはどうでしょうか。若い人が教会へ来たとき、「よう来たなあ」と言っているでしょうか。「最近、仕事はどうや?」「家族はどうや?」「子供は元気か?」という一言を出しているでしょうか。ひのきしんをして帰ったならば、

「相手の満足に繋がる一言」を出してあげたいと思います。

まずは相手を知ろうとすること。これが今の若い子たちにとって、「教会へ行こう」「先生の話聞いてみよう」と思うハードルを大きく下げるきっかけになります。

教えが傍にあるありがたさ

3月に「学生生徒修養会・大学の部」がありました。救護スタッフとして来てくれたある子が、「私は、信仰をして代を重ねている人が羨ましいんです」と言うのです。その女の子は信仰初代ですが、「どうしてそう思ったの?」と尋ねてみると、彼女は日頃病院では身上の重い方の病棟にいたのだそうです。お医者さんに余命宣告を受けたような人も多く、そうした方は、「わしももう終わりだ」と世をはかなんでいる方が多い。家族が会いに来て、看護師に対しても無愛想で、いい顔をしないそうです。「でも、お道の人は違いますよね。そんな身上になっても、これはどんな神様のメッセージだ

ろうか。どうやっておたすけたでしょうか、という話が出る。これってすごいことだと思いませんか? と言うのです。

この言葉を聞いたとき、私は自分自身の信仰の元一日を思い出しました。

私は大学を出て本部青年として勤めておりました。結婚して子供が生まれ、2人目を授かったとき、妻が「特発性紫斑病」という病気と言われました。血小板が突然減って、血が固まらない病気で、紫斑とは、打ち身をするときできる紫色のあざです。出産のときには必ず出血を伴いますから、出産は危険です、と言われました。

「なぜこんな病気を患えてもらったのだろう?」と思い、いろいろな先生に話を聞き、本も読んで、あの手この手で、なぜこんなことになったのかを自分の中で納得しようとしていました。

輸血をして何とか症状が落ち着いたので、一旦退院しました。家で食事を済ませると妻が、「お母さん、今日から私も同じ薬を飲みま

す」と母に言いました。母は膠原病だったので、食後にたくさん薬を飲むのですが、膠原病も実は血の身上で、妻も同じ薬を飲むことになったのです。すると母が昔、祖母から聞かされた話として「火と水とが一の神。これがなければ血液は身体を巡らないんだよ。血液は栄養と酸素を運ぶだろう。これがなきゃ、私たちは生きていけないんだ。そこへ見せてもらったんだよ。しっかり感謝しているか。御恩に報いているか」と聞かせてくれました。

そのとき私は「これがいんねんか」と思ったのです。実は私には、死産だったのですが姉がいました。私が2番目なのですが、私を身籠ったときに母は膠原病になっていたのです。ゾクッとしました。

でもこれで、「なんとかしてお前たちをたすけてやりたい、というメッセージなんだ」と思えた。スポンと腑に落ちました。「お前も心を定めてしっかり通れ」と言っていたのだ。

では、御恩報じは何かと言えば、

私の家はおたすけしかない。こうして私は、今を歩ませていただいている。

そう思うと、「代を重ねる」とは、このお道でたすけていただいた時があり、今をどう歩んでいけばいいのか、どうすればたすかるのかを教えていただいている。「教えがいつも傍にある」ことが、どれだけありがたいか。

しかし、代を重ねれば重ねるほど当たり前になり、忘れてしまっている。若い看護師さんが言った「代を重ねている人が羨ましいんです」という言葉で、私はそのことに気付かせてもらいました。

さらに、その看護師さんは、「私の母にこの教えを伝えましたが、母はまだ信じてくれていません。なので、私は結婚して子供を授かれば、ぜひ子供に伝えていきたい。この道で間違いないよって言うってあげたいんです」と言うのです。素晴らしいですね。

これは今の若い子に、私たちが向き合って伝えていかなければならないことだと思うのです。

一緒にたすかりを願う

さて、2つ目のポイントは、ぜひ若い子をおたすけに巻き込んでほしい、ということですね。

あるおじいちゃんは、信仰熱心で、教会の月次祭に来てくれますが、子供や孫はタイミングが合えば来るぐらいでした。しかし、講社祭に行くときみんな出てきてくれるので、お孫さんが小学校の頃から、「今日は神様のお屏が開くやう。一番神様とお話できる日や。こつちのお願いを聞いてくれる日やで」と言っていたのです。そして「いつも、元氣においてもらってありがとうございますって言うやろ。今日はそれにプラスして、〇〇さんっていうおばちゃんが足の骨を折って入院したから、一緒にお願いしてくるか？」と頼んだのです。「いいよ」と言ってくれました。

そして大切なのは、そのときだけでなく、ぜひおたすけの経過を教えてあげてほしいのです。

次の月に、「リハビリが始まって

ると思ってたら、まだだつて。だからもう1回、骨が付きまようにつてお願いしてな」と頼むと、「分かった」。そして「リハビリが始まったよ」と伝えると、我が事のように喜んでくれる。「退院できたよ」と伝えると「ああ、よかった」となったわけですね。

これは私の勝手な持論ですが、「この道は素晴らしい教えだから、信仰しなさい」と100回言うより、「あの方のたすかりを、一緒にお願いしてくれるか」と1回言った方が、その子に信仰が伝わると思っています。なぜかと言えば、「会长さんは、神様を本気で信じている。本気でたすけてもらえんと思つている」という姿を見せなければならぬと思うからです。

その子は、今社会人として働いています。先日の講社祭でも、残業が終わってから来てくれました。おつとめをすることが、人のたすかりに繋がるということを感じてくれています。

ですから、皆様方が頭に思い浮かべている子たちにも、「〇〇さ

んが苦しんでいるから、お願いしてくるか」よかったら、今度月次祭にも来てや」という声を掛けていただきたいと思います。

もう一つ大切なことは、こちらが頭を下げることです。その子にも神様に繋がってもらいたい。そのために「頼むよ」「お願いね」と、まずはこちらが頭を下げる。

今の若い子たちは、「人のために」という思いは持っています。しかも、みんながみんなお道を嫌いなわけではない。お父さん、お母さん、会長さん方がどんな道を歩んでいるのかを知っている人は特にそうですが、ちょっと素直になれていないだけの子が多い。ぜひそういった子たちに、一言声を掛けていただきたいのです。

若者たちの道しるべ

私は大学生の頃までは、あまり父のことが好きではありませんでした。というのも、私は天理生まれで天理育ちです。父は教会長として広島へ行ったり、おちばの御用をしていたりで、父が教会でど

うおたすけをしてきたのか、本部の御用でどんなことしているか、あまり知らなかったからです。

そんな私の心を変えてくれたのは、第三者の声でした。うちの信者さんがあるとき、「あなたのお父さんに、こうしておたすけしてもらったのよ。ありがたいんだから」と教えてくださった。本部勤務をしている方が、「お父さんが勤務場所に来たらふわっとした空気になって、みんな勇んでお勤めできるのよ」とおっしゃる。

そうした声を聞いて、私は初めて父と2人で信仰談義をしました。「僕はこう思っている」と、父は一通り私の話を聞いてくれて、「样吉もそういうことを思うようになったか」と言ってくれました。そこで初めて親子で向き合って、信仰的な話ができたと思っています。その日を境に、私の中で少しずつ父の見え方が変わりました。「父のそういう姿があつて、今があるのか」と知り、「じゃあ、私に何ができるかな」という考え方に変わっていききました。

皆様も「お父さん、お母さん、こうやって通っておられるよ」「おじいちゃん、おばあちゃん、こうやっておたすけをされていたよ」という声を掛けていただきたいのです。

この道は親から子、子から孫へと信仰を繋いでいくのですが、意外と難しい部分もある。そこを補い合えるのです。

以前、地元で同じ支部の先生とにをいがけに歩いていたとき、「私は朝4時に必ず十二下りを勤めるんだ。年のせいで朝早いんじゃないよ。朝4時に十二下りを勤めたら、必ず一人おたすけいたただけるんだ。だから目が覚めるんだよ。だつてたすけていたただけるんだから」とおっしゃるのです。「すごいなあ」と思っていたのですが、それから数年後、その先生のお孫さんに出会ったので、「あなたのおおじいちゃん、すごいよね」と言つて、今の話をしたので。その子は、「朝からゴソゴソ何かやってるな」と思っていましたけど、そんなことをしているとは知りませんでした。

た」と言っていました。

お道の信仰者は慎ましかたが多いので、どんなおたすけをしてきたのか、どんな理作りをして、どうやっておたすけに向かつているのかを、自分では言わないのです。だから、身内でも意外と知らないと思うのです。

「あなたのお父さん、知ってるよ」と言っていただと、「そうか、こうやって通つたのか」ということを知れて、若い子たちが教会へ来るハードルが低くなります。

こういうことを、ぜひ若い人たちに教えてあげてください。それは、これから道を歩もうとする若い子たちにとつての道しるべになります。「そうか」と思える日が必ず来る。ぜひ第三者の声として伝えていただきたいと思います。

共に歩むとは

本年の学生担当委員会活動方針は、「真に助かるこの道を共に歩もう」です。

ある本部の先輩先生が、若い頃に三代真柱様から「丹精とはどう

いうことだと思う?」と尋ねられたそうです。「導くことでしょうか?」と答えたのですが、三代真柱様は「導くというと、上から引っ張り上げるようなイメージやろう。丹精は、共に歩むことや」とおっしゃったそうです。

この話を聞いて、私はいろいろ思案したのですが、「共に歩む」とは、例えば、赤ちゃんがハイハイをするようになった。そして立ち上がって1歩2歩と歩き出したことをイメージしてください。親はどうするでしょうか。何とか歩みを進めてほしい。でも前に転ぶやら後ろに転ぶやらわからないから手を差し伸べる。「こつちやで」と言いながら進むと思うのです。2歳3歳になったら、もう身体を支える必要はありませんが、どうこけるか分からないので、手を繋いで「一緒に行こうね」と声を掛ける。小学校へ上がったたら、手を繋いでと思ったら、「もうやめて」と言うかもしれません。トンボや蝶が飛んでいたら、そちらへ走っていくかもしれないし、転ぶ可能

性もある。「危ないぞ」そっちじゃないよ」と声を掛けて連れて行く。そして、もう少し大きくなったら、一緒に歩いていたつもりが、振り返ったらいない、ということがある。だから「今日は教会へ行く日だよ」今から一緒に買い物に行こうね」と、目的地を示してあげることが必要になる。

共に歩むとは、相手のことを知り、相手が今どこへ向かおうとしているのかを知った上で、こちらが声を掛ける。よちよちだった手を差し伸べる。危ないと思えば手を引っ張る。そういうことをしなければならぬのです。勝手に育たない。そう思いましたら、三代真柱様の「丹精とは共に歩むこと」との一言は、大きくて深いと思うのです。

先日、ある高校の先生から聞いた話ですが、「今の高校生は、人に頼ることができない」とおっしゃるのです。そして自分がしたいと思うことを考える前に、「怒られないようにするにはどうしたらいいか」と思うのだそうです。もっと

言うところ、その場のノリでちょっと行き過ぎてしまふところもある。

これは、「失敗しないように」と思うから、失敗した経験がない。失敗の経験がなくなると、人の痛みが分からなくなる。

だからこそ、そんな子たちに、「親々の信仰はこういう信仰なんだよ。私たちはこうやって歩んできたよ」ということを教えていたきたいのです。

学修に来る子や学生会の子たちと話をしておりましたら、みんな真面目です。真面目という言葉にしてみようと便利ですが、「自分に自信がない」子が多い。

だから、一緒に歩むのです。私は「手を差し伸べる」という言葉にしています。一緒に歩もう。

この道で間違いないよ」と手を差し伸べてください。若い子たち、手をつかむ力は持っています。どうぞ「一緒に歩もう」と伝えていただきたいのです。

一生で1回でいいから

この夏の「学生生徒修養会・高

校の部」には、芦津大教会から10名の高校生が参加してくれました。

ありがとうございます。

皆様方には、ぜひ事後の丹精をお願いしたいと思うのです。なぜなら、「なぜ参加しましたか」という質問に、1年生は「親に言われて」という回答が圧倒的に多くて、2番目が「会長さんに言われて」です。高校生は自分から行きたいと思っていく人は少ないのです。

そんな子たちが4泊5日のプログラムを受けて「学修で学んだことを、今後どう生かしたいと思えますか」という質問に、「おつとめやひのきしんにやりがいを持って取り組みたい」という回答をする子がいる。3年生には「会長長になれるように頑張ります」と書いている子もいる。

しかし、高校生の時代は熱しやすく冷めやすい。そのときは気持ち盛り上がりつつも、日常の中でだんだん忘れていってしまう。

ですから、事後の丹精をしていただきたいのです。学修できっかけはできました。そのきっかけを、

ぜひ生かしていただきたいと思います。

ある女の子は、「どんな気持ちで参加しましたか」という質問に、「嫌々参加した」に丸を付けて、「親に勝手に申し込まれた」と書いていました。それでも来たのですから偉いですよね。そして最後のところに「天理教に繋がってよかった。天理教の良さをもっと感じたい」と書いていたのです。

嫌々来た子が、5日間でこれだけ変わっていきます。この先も高校の部、大学の部、そして高校卒業生コースに、ぜひ声を掛けていただきたいと思います。それも、「一生に1回でいいから、行つておいで」と言ってください。その1回でガラッと変わった子がたくさんいます。

コロナ禍の前は、学修は1週間でしたが、関東の子が学修に行くと思うと、前後1日かかりますから、約10日間かかるわけです。

ある会長さんが、男の子に「一生に1回でいいから学修に行つてこないか」と声を掛けたところ、

「会長さん、高校生の夏休みはひと月しかないんですよ。そのうちの10日間行けて、無理無理」と言われたそうです。2年生でも3年生でも声を掛けたそうですが、無理でした。そして大学に入って、またその会長さんはその子に声を掛けた。すると「大学生の春休みは2カ月もあるんですよ。行ってきます」と言ってくれたのです。

その子は大学の部に参加してどうなったか。「お道の教えってこんな教えなのか、おつとめてそういうことだったのか、ひのきしんってそんな意味があったのか」ということを知って、目から鱗だったそうです。そこから彼は毎年学修に参加しました。

いつ届くかはわかりません。ただ、この学修で確かに学生は変わっていきます。ぜひお近くの学生さんに声を掛けてください。「一生に1回でいい。ぜひ行って、教祖のお近くでこのお道のありがたさを感じておいで」と言って背中を押していただきたいと思います。実は私も学生時代に学生会の活

動をやっております、感じるころとがあるのです。それは「人のために何が出来るだろう」「自分に何が出来るだろう」「どんな声掛けをしたらいだろう」ということを学生の時分に考えることは、普通はありません。

でも学生会にはそれがあるのです。「初めて来てくれた子に、どんな声を掛けようか。どうやって喜んでくれるかな」という、心遣いができる場所が学生会です。しかも、それを見せてくれるのが、親や先生ではなく、同じ年代の学生なのです。「なぜ、同年代の子たちが、そんな心になっているんだろう。すごいな」と思う場所なのです。言葉ではなく、姿で感じていきます。そして「自分もそうなりたい」と思ってくれたらありがたい。

皆様方、学生会に学生を送り出してください。「ちょっとでもいいから、参加しておいで。一緒になつて楽しんでおいで」と参加を促していただきたいと思います。

芦津学生会は、11月29日に大教

会で総会を開催すると聞いております。学生はおつとめを通して、また多くのことを学んでくれると思いますので、どうぞ声を掛けてくださるようお願いいたします。

この道で間違いない

一昨年の「学生担当者大会」に真柱様からメッセージを頂戴しました。その一節に、

学生会に集まってくる学生たちは、みんないんねんあつてお引き寄せいただいた、大切なこの道の後継者であります。そして皆さんは、そうした学生の育成を心がけておられるはずであります。学生たちの成人を願って彼らと向き合い、心を込めて親神様、教祖の親心を伝えて、幸せにつながるこの道の通り方を教えることに力を尽くしてもらいたいと思います。

『みちのとも』立教188年1月号とあります。

芦津に繋がっている若い子たちは、いんねんあつてここへ繋がっている。その子たちを丹精するの

は、ここにおられる皆様方だと思ふのです。このお言葉は「誰かがするだろう、ではないぞ」とおっしゃっていただいているように、私は思うのです。皆様方一人ひとりが、芦津の若い子に声を掛けて、その子がどんなようほくになつていくのかをイメージしながら、「さあ一緒に歩もう」と手を差し伸べる。これが、今を歩む私たちの役割だと思ひます。

またもう一点、「幸せにつながるこの道の通り方」を教えてほしいということだす。

この道で間違いないのです。この道を通れば、必ず幸せになるのです。まずはその信念をこちらが持つて、毎日を歩む。この気持ちを持つて一緒に歩んでこそ、今の若い子たちに信仰のありがたさ、教祖の温かさが伝わっていくと思つております。

これから芦津に繋がる若い子たちが生き生きとこの道を歩んでくれますことを祈念いたしまして、今日のお話とさせていただきます。

秋季霊祭執行

9月24日、大教会神殿、祖霊殿で秋季霊祭を執り行った。午前10時より十二下りのおつとめを勤めた後、祖霊殿の儀。

大教会長が祭文を奏上。霊様方の真実の伏せ込みに対してお礼を述べた後、「霊様方がお通りくださった御教えの道の後を誇りを持って歩ませていただき、道の進展を期して一手一つに心勇んでたすけ一条に努め励ませていただく所存でございます」と決意を述べられた。

続いて、井筒家をはじめ在籍者、教会長、各会の代表者と、この日合祀された霊様の関係者が祖霊殿前に参進し、参拝した。

最後に大教会長は、「私たち信仰の目標は、あくまでも教祖のひながたであり、それを我が道として懸命に通つてくださった初代や先人方の歩みは、私たちの大いなる手本に

なる。私たちも、これから道を辿つてくれる人々がひながたを辿るためのお手本となるよう、道の歩みを進めさせていただきたい」と挨拶を締め括られた。

秋季霊祭合祀

秋季霊祭において新たに合祀されました。

谷 正敏之霊

福田荘分教会五代会長

惠光一郎之霊

大朝分教会二代会長

平川誠一之霊

美和名分教会教人



立教百八十九年 秋季霊祭祭文

この祖霊殿にお鎮まり下さいます、初代真柱中山真之亮の霊様、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊蔵の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様をはじめ、歴代会長の霊様、眞明芦津の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようばく、信者諸々の霊様、更にはこの度新たに靈代に書き記し合わせて祀る吉野川部属福田荘分教会五代会長谷正敏の霊様、大島部属大朝分教会二代会長惠光一郎の霊様、美和名分教会教人平川誠一の霊様、併せて千五百三十六柱の霊様の前に天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

御本部四柱の霊様には、道の芯として神一条に御丹精下され、温かき親心を以て道の子をお導き下さいました。お蔭をもちまして、今日のたすけ一条の道がございます。又、初代梅治郎の霊様には不思議なお手引きによりこの御教えの道にお引き寄せ頂かれ、御恩報じ一筋に道のため真実の限りを尽くして、眞明芦津の道の礎をお築き下さいました。又、夫々の霊様には親神様のお手引きのまに／＼眞明芦津の道の草分けの頃から、ならん中をも真心の限りを尽くしてたすけ一条にお通り下され、或は国々処々に在っては、幾多苦勞の道中も心勇んで道のためにお励み下さいました。これの道が年限と共に結構な理をお見せ頂き、幾重の事情も乗り越えて、今日も変わらず御教え通りに通らせて頂けますのも、親神様、教祖の厚き御守護、深き親心の現われではございますが、又一つには霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた真実の賜物と、感謝の心で朝夕一心に御礼を申し上げております。その中にも今日のこの日は今年の秋の霊祭を執り行う日柄でございますので、御前に種々の心尽しの物を供え、在籍者をはじめ、参き集う人々と共に、霊様方の御遺徳を偲び御生前の御丹精を改めて厚くお礼申し上げます。私共をはじめ、眞明芦津に繋がるようばく一同は、霊様方がお通り下さった御教えの道の後を誇りを持って歩ませて頂き、道の進展を期して、一手一つに心勇んでたすけ一条に努め励ませて頂く所存でございます。何卒、一同の道に尽くす真実を御心安らかにお受け取り下さいまして、心のふしんに励ませて頂き、陽気ぐらし世界への足取りを着実に進めさせて頂けますようお見守の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

創立100周年記念祭

高水分教会

高水分教会（齊藤愛子会長・徳島県美馬郡）は、10月11日、大教会長をお迎えして、創立100周年記念祭を執り行った。

高水の道は、齊藤勇斎が精神の病から全快の御守護を頂き、布教する中に不思議なすがすがしさが、大正14年12月7日に、峰行弥五郎を初代として理のお許しを戴き、今まで道を繋いできた。

午前10時、記念撮影の後、齊藤会長の祭文奏上。続いて、陽気におつとめを勤め、大教会長がお話。

100年の労を労われた上で、これからの歩みとして、なるほどの人、伏せ込みと理作りについて話を進め、「信仰の元日に立ち返り、今日を新たなスタートとして、なるほどの人にならせていただく成人をお誓いして、ご恩報じの心で勇んで成人の歩みを進めて

いただきたい」と話された。

引き続き挨拶に立った齊藤会長は、「これからまたすけ

一条、つとめ一条に徹し、日喜び心がいつぱい咲くような心遣いでつとめたい」と決意を述べた。

直会では、笑いの絶えない雰囲気の中、お楽しみ抽選会などで盛り上がり、新たなスタートを祝った。

参拝者は、48名であった。



総会を盛り上げる会

学生会

芦津学生会（毛利祐太委員長）は、9月21日、夏のレクリエーション行事「総会を盛り上げる会」を実施した。これは11月29日に開催する学生会総会に向けて企画されたもので、高校生5名、大学・専門学校生8名が参加した。

午前10時、詰所に集まった参加者は、本部神殿にておつとめを勤めた後、西回廊で回廊ひのきしんを行った。

詰所に戻って、大広間で簡単な自己紹介をしながらゲー



ムやレクリエーションで楽しんだ後、バーベキューをしてお互いの交流を深めた。

最後に毛利委員長が「11月29日には、友達を誘って、大勢の仲間と総会をつとめよう」と挨拶し、解散した。

こかん様に続く会

婦人会女子青年

9月27日、婦人会女子青年（岩切寿代委員長）は、「こかん様に続く会」を詰所で開催した。この会は、どんな困難な中も教祖を信じ、明るく素直に通られたこかん様のお姿をお手本として学び、少しでもそのお姿に近づかせていただこうとの思いから、毎年1回開催している。

午前9時、常任委員と担当者が集合し、昼食のお弁当を手作りした。その後、担当者からのこかん様の浪速布教と眞明組の踊り講についての話に熱心に耳を傾けた。

マイクロバスで唐古鍵史跡



公園に移動し、周辺の住宅街で、2グループに分かれてにをいがけ。「路傍講演は、お話が聞こえていなくても、車の中から挨拶をしてくれたり、じっと見てくれる人もいた。これも天理教を知ってもらうにいがけになるんだな、教祖に喜んでもらえたら嬉しいな」との感想が聞かれた。

公園で昼食、レクリエーションで楽しい一時を過ごした後、神殿で参拝。詰所に戻って、11月1日の「女子青年大会」の準備を行った。

参加者は、女子青年9名、担当者6名、計15名であった。

にをいがけ強調の月

布教部

にをいがけ強調の月の9月、全国各地で教会長を中心に勇んだにをいがけ実動が展開された。

芦津大教会布教部（竹内義忠部長）は、にをいがけ強調の月の取り組みとして、「全教会が9月月次祭の日ににをいがけを」1人のようにほくが3枚のリーフレットを手渡そう「大教会毎日神名流し」の3点を打ち出し、教会長、ようぼくの勇んだ実動を促した。また、大教会や詰所、各教

会の実動の様子を芦津大教会の公式インスタグラムで発信し、布教の意気を高めた。

◇ ◇ ◇

大教会は、午前9時より神殿当番奉仕者、在勤者を中心に、「毎日神名流し」を実施。神殿で参拝した後、大教会周辺の神名流しを行った。その後、有志で路傍講演、戸別訪問、リーフレット配りなどを積極的に行った。

大島分教会（加世田洋会長・鹿児島県奄美市）は、9月の取り組みとして、「毎日」にをいがけ」を実施。9時に教会に集合し、神名流し、路傍講演を行った。週末は子供たちも参加し、賑やかに勇んで活動を行った。

部内教会やようぼくには、月次祭後の布教活動や1人が3枚のリーフレットを配ろうと呼びかけ、LINEグループでお互いの活動を投稿し、励まし合いながら活動を行った。

19日の祭典後は、52名の参



拝者が4班に分かれて神名流しを実施。加世田会長は、「初

めての方にもフリップで路傍講演を体験してもらい、子供と一緒に勇んで活動できました。地域の方にも天理教さん勇んでますねと声を掛けてもらい、今後も布教を意識してつとめたい」と語った。

芦姫分教会（北村浩会長・大阪市西淀川区）は、9月の取り組みとして、ようぼく1人が3枚のリーフレットを手渡そうと声を掛け、以前より行っている子ども食堂やゴミ拾いなどを9月も実施した。

10日の祭典後は、8名で神名流しを実施。北村会長は、「信者さんも一緒に神名流しは初めてで、上級の先人が丹精を重ねてくださった街並みに神名流しができたのは感無量でした。今までは、これも大事なおたすけの思いで、里親や子ども食堂など、子供や福祉に力点をおいていたが、改めて原点に帰ったにをいがけ、おたすけの実行にも励みたい」と話した。



鎮名分教会（日檉勝郎会長・三重県名張市）は、9月の取り組みとして、集まっのにをいがけ実動は難しいので、



教会に繋がる方々に、それぞれの地域で自分に合ったにをいがけの実践に努めていたたくような声を掛けた。

5日の祭典後は、参拝者の中から11名、教会周辺の神名流しを実施した。

日檉会長は、「今後も一人ひとりが、にをいがけを意識してもらえように根気よく声を掛け、実践していきたい」と話した。

竹内義忠・布教部長は、「この9月のにをいがけ強調の月を吉祥として、一人でも多くの方がにをいがけを意識し、信仰の喜びを伝えることの大切さを実感できるようになればと願う」と話した。



修養科と修えて

親神様、教祖にお使いいただけるようになりたい

真明彰化教会 林 韋祺 43歳

43歳になるまで、私はずっと、「一生懸命仕事をし、自分の責任を果たし、人に迷惑をかけなければ、それで成熟した責任ある人間なのだ」と思っていました。だから、いつも物事をきちんとやり遂げることに一生懸命でした。しかし、自分から人に歩み寄り、相手を自分の心の中に置いて考えるということは、あまりしていなかったように思います。

今振り返ってみると、過去の自分が悪かったのではなく、まだまだ改めていかなければならないところがたくさんあったのだと思います。

修養科に入らせていただき、親神様、教祖のお導きと御守護の中で過ごすうちに、少しずつ分かってきたことがあります。それは、

これまで自分が一生懸命に努力してきたことは、ただ「他の人から見ても十分だと思われること」を指していたのであって、教祖がお教えくださった「丸い心を持ち、何事も人の身になって考える」ということとは違っていたのだということです。

これまでの私は、一生懸命に仕事をこなしていても、必ずしも身近な人のことを本当に気に掛けていたわけではありませんでした。「人に迷惑をかけなければ、それで十分だ」と思っていました。その一方で、もう一歩自分から行動して、相手に温かさや安心を感じてもらうことができないかと考えることは、あまりありませんでした。

また、思い通りにならないことがあると、まず相手の足りないところに目を向けてしまい、自分自身を振り返ることができていませんでした。

修養科に来て、初めて分かったことがあります。本当に修養しなければいけないのは、自分の言葉

や行動だけではなく、自分自身の心なのだということです。

修養科では、私に別の誰かになすることを求めているわけではありません。親神様、教祖の御守護のもと、先生方が日々の身をもって示してくださる姿を通して、少しずつ自分自身を見つめ直し、そして、人を愛すること、思いやり、気に掛けることを学ばせていただきました。

この3カ月間で、私が最も心を打たれたのは、毎日の生活の中にある、一見するとほんの小さな出来事の一つ一つです。先生方は、相手がまだ何も言わないうちから、その人が何を必要としているのかを察してくださいます。心のこもった声掛け、さりげない気遣いやタイミングを見計らった声掛け、そして、人知れず行ってくださっている小さな心遣い。その一つ一つが、とても細やかで、自然なのです。

先生方の日々の身をもって示してくださる姿を通して、教祖がお教えくださった「陽気ぐらし」と

は、このような姿なのではないかと思うようになりました。そして、信仰とは、どれだけ多くの教理を知っているかではなく、教祖の御教えを、日々の言葉や行動の中で実践していくことなのだと、より深く感じるようになりました。

今回、桜が散り終わり、つつじが咲き始める季節の中で、私はよく境内のつつじを眺めていました。その頃、ふと、「親神様は、この一面に咲き誇るつつじを通して、私たちに本当の愛とは何かを教えてください」と思いました。

つつじの花言葉は「深い愛」だと言われています。それは、親神様が子供である私たちを深く慈しんでくださるように、私たちも親神様を慕い、互いに相手を自分の心の中に置いて生きていくことなのではないかと思えます。

私は、教祖がずっと私たちに教えてくださっているのは、まさにこのような心なのではないかと思っています。自分のことだけを考えるのではなく、まず相手のことを考



修養科3カ月目「修了おつとめ総合まなび」で
三味線をつとめる林さん

えること。誰かが困ってから手を差し伸べるのではなく、相手が何を必要としているのかを自分から察し、行動すること。人を変えることを求めるのではなく、まず自分自身の心を改めること。

43年間かけて身についた癖性分がたったの3カ月で完全に変わるものではないことは重々承知しています。これからの私は、まだ弱いところもあるでしょう。自分のことばかり考えてしまうこともあるでしょうし、まだまだできていないこともたくさんあると思います。それでも、これから自分自身

を見つめるための「ものさし」を、私はもう知っています。

以前の私はよく自分に「今日は、やるべきことをきちんとできたのだろうか」と問いかけていました。

これからは、それだけではなく、「今日は、人を本当に自分の心の中に置いて過ごすことができたのだろうか」と、毎日自分に問いかけていきたいと思っています。そして、「もし教祖だったら、今日、どのように考え、どのように行動されるだろうか」と、自分自身に問いかけていきたいと思っています。

その問いを忘れず、何度でも教祖の御教えに立ち返り、真心をもつて自分自身を振り返り、心を整え、そして実践していく。私は、たとえ毎日ほんの一步ずつであっても、親神様の御守護のもとで、一步一步、自分の人生を変えていくことができると思っています。

修養科が私に残してくださったものは、3カ月の思い出だけではありません。これから一生かけて、自分自身を改め続けていこうと思う、その種を心の中に植えて

いただきました。修養科の修了は、終わりではなく、実践の始まりです。

私は、ただ名ばかりのようぼくになるのではなく、本当に親神様、教祖にお使いいただけるようぼくになりたいと思っています。自分に大きな能力があるからでも、大きなことを成し遂げたいからでもありません。ただ、自分の身近にある小さな一つのことから始め、教祖のお教えを、黙々と実践していきたいと思っています。自分を低くし、相手の立場に立つて考え、私

から自分が努力していく方向を示していただき、本当にありがとうございます。修養科で教えていただいたのは、どうすればもっと優れた人間になれるかということではありません。教祖の心を我が心として、人のことを思いやり、人のために生きることを学ぶことでした。

これから私は、修養科でいただいたこの心を大切に胸に抱き、一人ひとりとのお会いを大切にし、その一つ一つを、自分自身を改める機会として大切にしていきたいと思っています。

もし、3カ月後の私が、3カ月前の私よりも、一人でも多くの人のことを思いやり、一人でも多くのの人に安心を感じてもらえるようになっていたなら、私は、親神様、教祖が私を修養科へと導いてくださった、この大きな親心に、少しでもお応えすることができたのではないかと思います。

(天理教海外部発行)

月刊中文『天理』8月号より

(翻訳して転載)

教務部報

教養掛(9月)

主任

瀧本 庄司

教養掛

吉田 充人・大西 直喜

木村 理恵

教人登録

吉田 稔(今津原)

立教189年9月8日

教人資格講習会第165回修了

奥田 大介(周 宝)

立教189年9月10日

修養科第1021期修了

谷上 喜美(眞 一)

周 家琦(眞明新營)

立教189年9月27日

おさづけの理拝戴《8月》

中山 律子(島 原)

(1名)

初席《8月》

(1名) 脇町・東大屋・

芦姫・浪華浦・
明道・眞明新營
(順序運びより 6名)

大教会外塀改修工事

ひのきしん

大教会の外塀改修工事は、
9月28日に作業を再開。北面
東側と東面の仮囲いを解体し、
南面に移設。また解体した基
礎部分のひび割れ箇所を補修
して、鉄筋を差しこむ穴をド
リルで開け、10月3日より北
面東側からブロックを積む作
業に入った。

ブロック積みは特に1段目
が大切で、高さ・間隔・面通
りの全てを揃える必要がある



ため、積んでは確認、揃って
いなければやり直しと、作業
が難航している。10月12日時
点で、北面は2段目、東面は
1段目に取り掛かっている。
なお、9月3日から10月12
日までのひのきしん者は、延
べ101名に上っている。

月例統計(自令和8年1月1日～至令和8年8月31日)

項 目 名 称 (内教会数)	初 席	の おさ づけ 理 戴	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	1	1		
東 津 (13)		2		3
吉 野 (29)	7	2	2	
島 原 (16)	2	2		
日 方 (15)	3	3		
稗 島 (7)	3	1		
本 津 (2)				
始 良 (2)				1
津 和 (12)				
門 司 (6)		1	3	1
當 別 (6)	3			
大 島 (26)	6	5	2	2
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)	3	1		
四 ツ 山 (5)	2			
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 山 (3)				
青 保 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)	1			
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)		1		1
紀 周 (3)	4		1	
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫 眞洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)	1			
明 道 (1)	3			
芦 東 (1)			1	
和 鎮 (3)		2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)				
眞 明 彰 化 (2)	10	5	3	
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	49	26	12	8

第6回芦津学生会

多くの仲間と一緒に
おつとめを勤めて
教祖に喜んでいただこう

11/29日
AM10:00～
おつとめ・式典・レクリエーション
於・芦津大教会

おつとめ練習日
10/11日 11/8日
AM11:00～
神聖参拝、おつとめ練習
於・芦津詰所

第6回芦津学生会総会
11月29日(日) 於・大教会
内容・おつとめ、式典、レクリエーション